

あなたの道を主にゆだねよ

吉岡 久美子

私は生まれたときから、あなたにいただかれています。
あなたは私を母の胎^{たひ}から取り上げた方。私はいつもあ
なたを賛美しています。
(詩篇 71・6)

私は一九五二年、東京の目黒区緑が丘で生まれまし
た。私には、年の離れた三人の兄がおり、私は末っ子で
したので、父も母もとても可愛がつてくれ、父の名前
から「久」、母から「美」をとり、久美子と名付けたそう
です。

五歳になって、奥沢の教会付属の幼稚園に通い始め
ました。近所の友達五人と、子どもだけで道草しなが
らの楽しい毎日でした。イエス様のお話を聞き、聖書
の紙芝居を見、朝に、お弁当時に、帰りに、賛美歌を歌
い、お祈りを覚えました。クリスマスの降誕劇^{こうたんげき}の楽し
さは、今も鮮やかに思い出されます。

私は丈夫^{しやうぶ}で運動の好きな子どもでした。部活はバス



夫の賢一さんと



ケット、習い事は日本舞踊。お稽古に励み、名取りを夢見ていました。ところが高校受験を控えた十月に、突然身体が浮腫み始め、腎臓病のネフローゼ症候群と診断され、入院生活が始まりました。以後二十歳を過ぎるまで、入院生活を繰り返す療養生活の日々になりました。

当時の腎臓病の治療は、治療食、安静、薬の服用でしたから、強い薬の副作用に悩まされながら、寝ながら本を読む事や勉強する事だけの生活になりました。学業は度々中断せざるをえませんでした。が、大学の先生をしていた兄から文学や芸術に係わる世界を教えられて、学ぶようになりました。

入院病棟では亡くなっていく方が多く、人は如何に生きるべきかの問いかけが続き、活字に浸っているうちに、聖書への関心が強くなっていました。

十八歳の時、母親ほど歳の離れた方が、隣のベットの入院して来られ、親しく話をするようになりました。この方はクリスチャンでした。私はこの方から聖書を

いただきました。間もなく退院されましたが、その後も度々お見舞いに来てくださり、ご自分が読んだ福音関係の本などをくださいました。解らないところばかりでしたが、聖書を通読しました。交流はそれからずっと続き、結婚しても、子どもが大きくなっても、その方が天国に召されるまで続きました。歳の差を超えた、いつも同じ目線での会話は楽しく、「これはイエス様からよ」と、その時々、私に必要なものを違えることなく、くださいました。

二十歳をすぎて家庭療養になりました。その頃には既に父も母も亡くなっており、三人の兄たち夫婦が責任を持って私の面倒をみてくれていましたが、上尾で所帯をもっていた兄夫婦が、回復にはのんびりした所がいいからと、皆も賛成して、私は上尾に呼ばれました。私はいよいよ上尾に来ました。余計な事をしてくれたと内心思いつつ、一冬を誰も知らない土地で、兄

嫁さんと幼い甥と、それでも和やかに過ごしました。

春になり、家の前の川の柳が芽吹き、その緑の美しさを眺めていた時に、今の主人と出会いました。主人もまた足の手術を終え、療養のために帰ってきていた隣家の人でした。何だかずいぶん明るい人だなと思いました。

立ち話に花が咲き、文学の話や、聖書の話をし、近くの教会を教えられ、行くように勧められました。私は通うようになりました。二十二歳のクリスマスに、主イエス様を自分の救い主として受け入れました。

二十四歳の秋に、主人の通っていた東京の教会で結婚式をしました。主人の母親はすでに亡くなっていましたので、義父と三人での生活が始まりました。義父はとても厳しい人でしたが、段々に心を開いてくれ、老いてからはすべてを私に任せてくれるようになりました。特に楽しみにしていたのは、家族が揃う夕食の

団欒、お祈りを待つ時でした。騒ぎ回る孫たちに、「お祈りだから、早く座りなさい」と急かせては、かきこまっていました。二十年間共に暮らし、家で孫たちに囲まれて召されました。

私には二人の娘が与えられましたが、産後の肥立ちが悪くて、救急車で入院という事態もありました。その都度皆さんの祈りと助けを頂き、守られてきました。幸いに子どもは丈夫に育ち、私は腎臓の方も回復して、子育て、義父の介護と忙しい日々を送りました。

私たちが結婚して数年後、私を上尾に呼んでくれた兄夫婦も教会へ導かれて、共に主にあって生きる恵みにあずかったことは、更に大きな喜び、力でした。隣には兄夫婦一家、裏手には、主人の妹一家が住んでおり、若い三家族は一緒に子育てをしながら、協力し合って家庭を築いていました。兄夫婦も義妹夫婦も、それぞれ自分の家を建てて引越して行くまで、親身な交流は続きました。

6人の証し

Ursel HERR leht

信仰が与えられ、二十数年が経った頃、私は教会の在り方に悩むようになっていました。そして、先にこのキリスト集会へ移っていた兄弟方のお祈りに導かれて、夫婦で教会を離れ、春日部キリスト集会に集うようになりました。

私は「初めの愛」に引き戻された喜びを味わい、みことばとイエス様中心の集まりに、萎えた心が生氣を取り戻していくのがわかり、嬉しく充実した日々を過ごすようになりました。

一方、兄夫婦は教会に残り、責任を負い続けました。

一九九八年八月、御代田のキャンプで大勢の兄弟姉妹と共にベック兄によって洗礼の証しをいたしました。キャンプ、家庭集会と、喜びが重なりました。

しかし二〇〇〇年夏に、厚生省の勧めで受けた検査で、今度はC型肝炎が見つかりました。既に産後二十

年以上の月日が経っていたため、カルテの記載が消滅しており、国の保証を受けられないまま、私は、また先の見えない治療の生活へと引き戻されました。

ところがそこでも主の御手が差し伸べられ、紹介されて行った新橋の慈恵医大病院に、大学勤務の一人の姉妹が備えられていました。年も一つ違い、私は毎週治療に行く度に、姉妹と話し、祈り、様々な事柄を共有し、分かち合う恵みを頂きました。姉妹が新橋での勤務から離れるまで七年余り、それは続きました。御翼の陰で十分に養って頂いた、という喜びがあります。身体的には辛かったのですが、楽しい通院で、励みになりました。姉妹が転勤されてから、更に八年通院が続きしました。

二〇〇九年には、脳動脈瘤が見つかりましたが手術をし、クモ膜下出血の危険からも守られました。二〇一五年、体力はすっかりなくなりましたが、新薬が効きC型肝炎は治りました。十五年の歳月が経って

いました。

この十五年間、私は治療のための通院だけで、人のために労することは、何一つできませんでした。でも家族親族には様々な出来事がありました。

まず、入院が始まった二〇〇一年五月に、甥の和知克治が水上の川の事故で突然召されたことです。二十八歳でした。絶望のどん底にあった主人の妹一家は、イエス様の慰めに満たされ、兄弟姉妹のお祈り、賛美と、ご奉仕に支えられて、息子を天に送ることが出来ました。

既に結婚が決まっていた姪(克治の妹)は、兄を亡くした悲しみに、泣き暮らしておりました。喪中の家では結婚式が考えられない状態でした。でも、ベック兄が、夏のキャンプで克治の納骨を済ませて、翌日結婚式をすればいいと言ってくださいましたので、親族とごく親しい友人と、この時もまた、兄弟姉妹の美しい賛美とお祈りとご奉仕により、温かな式をさせていた

だきました。姪夫婦には二人の娘が与えられ現在十七歳と十四歳になります。感謝です。

数年後、私の二人の妹も結婚し、一人は主イエス様を信じ、救われ、御代田で結婚式を挙げさせて頂きました。

私はと言いますと、これらの様々な式に、いつも用意された椅子に座らせて頂いておりました。何もできないことも許されて、主の愛と哀れみで満たされました。感謝でした。

私の身内の者は皆、今も救いの約束の中に置かれてるので感謝して、祈っております。

そして今一つ祈っていることがあります。

今から言えば、私の最後の治療の年となった、二〇一四年夏のことです。上尾の兄が大腸癌で召されました。私の所には何の知らせもありませんでした。葬儀に出る事も

許されませんでした。以来、同じ市内に住む家族とも、未だ音信不通です。兄夫婦と別々の信仰の道を進んだ果てのことに、長い間私は塞^{ふさ}ぎ込みました。様々な感情が渦^{うず}巻き、自問自答するばかりでした。六十数年にわたる肉親ゆえのわだかまりもありました。病気の治療より辛^{つら}く思えることもありました。

行き詰まった中で「詩篇のダビデの賛歌を読んで祈りなさい」と教えて下さったベック兄の言葉を思い出し、ポツポツ読み始めました。自分の思いでいっぱいでしたから、初めは素直に心には届かず、虚^{むな}しいものでしたが、次第に優しい気持ちに変えられるのがわかりました。物事を人間の次元で相対的に捉^{とら}えていたことが苦しみになり、光の射^ささない原因だったことに気付かされました。みことばには、単純な真実がありました。それは、「わたしを仰ぎ見て救われよ」(イザヤ45・22)という、イエス様の光です。仰ぎ見なければ見えない光で、誰にでも、いつでも注がれている命の光です。

た。解放されました。そして自分の内から次々とみことばが湧いてきました。

あなたはわたしを愛しますか。…わたしに従いなさい。

(ヨハネ 21・15～19)

民よ。どんなときにも、神に信頼せよ。(詩篇 62・8)

労苦はその日その日に、十分あります。

(マタイ 6・34)

数年が経ち、私のなすべきことは何か…そう問い始めた時、やっと静かに、私が遺^{のこ}された兄の家族、甥や姪の救いを祈れるようになりました。この地上で再び相^あ見^みる事がなくても、それはどうでもいいことです。ただ私がどこを向いているかが問われている。いつも動かず主を見上げていることだけが、唯一であると知る

ようになりました。

愚かで、わきまえのない私をいつも、いつまでも忍耐強く愛して下さいっている主に、感謝が溢^{あふ}れます。

イエス様は変わらぬ唯一のお方です。感謝と賛美をお捧げ致します。

私は二月二十日生まれなので、ガラテヤ人への手紙二章二十節を大事にしています。

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。

(ガラテヤ 2・20)

吉岡久美子(よしおか くみこ)

目黒区立中根小学校、品川区立戸越台中学校、NHK学園高等学校卒業

夫 賢一(けんいち)



主は私にかかわるすべてのことを成し遂げてくださいます 佐山恵子



夫のデイヴィッドさんと(右)

二〇〇四年の七月末に、私はアメリカ人男性と御代田の西軽井沢国際福音センターで結婚式を挙げました。その時、私はすでに四十歳をとうに越えていました。これからお話しするのは、若き日からこれまでの私を主がどのように憐れんで導いてくださったのか、その軌跡です。

義人はいない。ひとりもない。悟りのある人はいない。神を求める人はいない。すべての人が迷い出て、みな、ともに無益な者となった。(ローマ 3:10-12)

この聖書の箇所を読みながら、彼が突然、「これは、君のことだよ」と、いつになく真面目な顔で言いました。「彼」とは中学時代の恩師の弟さんで、時々英語を教えてくれる大学生でした。私は大学受験に失敗して、茨城の実家から離れて東京で浪人生活を送っていたのです。私はその方に密かに惹かれていました。

そのときの彼には、それまでにない、ある種の確信のようなものを感じました。私はその正体は一体何なんだろう、この人の持ったものを私も持ちたいと思い、それからまもなくして、吉祥寺キリスト集会のドアを開けたのでした。

一九七九年の十九歳になる夏でした。ドアの向こう側から、笑顔で迎えてくださったのはまだ五十歳になる手前のドイツ人宣教師のベック夫妻でした。お二人の持つ不思議なほどの明るく清らかな、それでいて強い確信に満ちた目がとても印象的でした。集会はまだ五十人にも満たない小さな群れでしたが、そこには静謐な祈りがあり、本当の神様はこの群れの中におられる、という気がしました。

彼は就職も決まり、一層落ち着いた感じになっていました。彼はその数箇月前に小学時代の恩師によって吉祥寺集会に導かれて、すでに主にある兄弟になっていました。何もわからないまでも、その人と一緒に日

曜礼拝に出られることが、私の浪人生活のささやかな喜びとなりました。

そんな喜びに浸っていたある秋の日曜日、礼拝前にベックさんが私だけ呼んで、集会の二階にある書斎で、こう告げたのです。「恵子、今日、彼の婚約発表があります」。私は絶句しました。そして、私のひそかな恋心は全部ベックさんにはお見通しだったんだ、という恥ずかしい思いと、好きだった人には集会の中に婚約者がいたという悲しい事実と、ただ涙がポロポロこぼれて仕方がありませんでした。そんな様子を黙って見ておられたベックさんは、「イエス様は、恵子を愛しておられます。イエス様は、愛しておられる者には、いつも一番良いもの、金銀銅の中で金のものをあげたいと思っています。銅のものはあげません。恵子の目には、彼は金のように見えたかもしれないけど、恵子にとって彼は金ではありません。いつか、きっと恵子にとっての金が与えられます。そしてその時、彼と結

6人の証し

Unser Herr lebt

婚しなくて本当によかった、と思うでしょう」と話してくださいました。そして、ベックさんの祈りの後に続いて、主イエス様を自分の罪の贖い主、救い主として受け入れました。恥ずかしさ、悲しさの中から、説明のつかない平安と喜びが心に生まれるのを感じました。帰省してその喜びをすぐに両親や二人の妹に伝えたのですが、両親は私が苦しい時に藁にもすがる思いで何か宗教が必要だったのだろう、という受け止め方でした。一方、中学生と小学生の妹たちは、私の単純に喜ぶ姿からすぐにイエス様を受け入れ、その場で三人一緒に正座し首を垂れて祈りました。それまで少しも姉らしいことをしてこなかった私でしたが、その時、心から妹たちを愛おしく思いました。主から頂いた「からし種」ほどの信仰は、幸い今も私や妹たちの中に宿り、主に守られていることは感謝なことです。

救われた翌年、私は志望大学に合格できました。大

学では「キリスト者学生会」に所属して、多くのクリスチャン学生から刺激や恵みを頂きました。また、浪人中、東京に友人がいなかった孤独な私に、主は吉祥寺集会で生涯の友となる岡根谷梨恵姉妹を与えてくださいました。その頃、集会の姉妹会では、ドイツで看護師を目指していたベック夫妻の四女リンデのために祈りが捧げられていました。その後、リンデは癌で召されましたが、「実を結ぶ命」として本にまとめられた彼女の証は、同じ歳の私の心に深く刻まれました。その証しによって「主イエス様をもっと知りたい」と思うようになりました。

大学生活を終えた私は、埼玉県の私立高校に英語の教師として赴任することができました。そこは、私立の生き残りをかけて、受験指導に熱が入る教育体制で、独り暮らしのアパートに帰宅するのは夜十時過ぎ、それからまた翌日の準備をするという新米教師生活が続

きました。そんな中、難しい人間関係にも悩み、およそ三年で精も根も尽きて、結局退職するはめになりました。意気揚々と教員生活を始めた私は、苦勞して仕送りを続けてくれた親の期待を裏切り、みじめな気持ちで茨城の実家に戻ることになったのです。思い返せば、この三年間は、吉祥寺集会から離れ、いつしかイエス様からも離れ、自分の力を過信した自分中心の勝手気ままに、傲慢な日々を送っていたのです。

立ち返って静かにすれば、あなたがたは救われ、落ち着いて信頼すれば、あなたがたは力を得る。

(イザヤ 30:15)

畑の広がるのどかな実家で養生しながら、車で十分ほどで行ける小さな福音派の教会に通い始めました。中年の牧師夫妻と十人にも満たない信者さんが集まる家庭的な教会でした。そして約一年後に、主は新しい

職場を与えてくださいました。実家から車で通勤できる鹿嶋市に新設された私立高校でした。私はその新しい高校を「主が与えてくださった場所」と喜び勇んで、再び頑張り始めたのです。私は二十八歳になっていました。

その頃の私や両親にとつての問題は、私の結婚でした。色々な方とお見合いをしても、ピンとこず、断ってばかりでした。なかなか心が動かされる相手に出会えないまま、私は教員としての日々に没頭していききました。

あつという間に三十歳を過ぎ、両親の焦りもまた募っていききました。ベックさんから言われた「金」はいつ現れるのだろう、そんなことを思いつつ過ごす中、母がある新聞社主催の「お見合いパーティー」に申し込んだから行くようにと言いつつ、私はしぶしぶ出かけました。そこで、コンピューター関連の仕事をしている男性と出会い、初めて心が動きました。それは、容姿がとても良い方だったのです。クリスチャンではあ

りませんでした。信仰の証しをして、結婚後にイエス様を受け入れてもらおう、そんな安易な気持ちのまま、双方の両親を紹介するなど、話は結婚の方向に向かうはずでした。しかし、出会ってから一年過ぎても、二年過ぎても彼の方から結婚の具体的な話が出ませんでした。こちらから思い切って切り出すと、はぐらかされてしまうという感じでした。そして両親も心配する中、最後に分かったことは、彼には私と並行して付き合っている女性がいて、二人を両天秤にかけてどちらにしようか決めかねて三年が経ったということでした。私はその事実打ちのめされ、そのことが分かった日に、主に心から悔いて詫言いました。再び、私は自分の思うままに、自分がいいと思うものは主がいいと思うはず、というような自分勝手で自分中心の歩みをしていただけでした。リンデが証しの中で示してくれた「主に信頼し尽くす」とは、ほど遠い情けない姿でした。今振り返ると、主にきっぱりと「だめなものはだめ」と堅固に

彷徨う羊を守っていただいていたことには気づきませんでした。

私は、いのちと死、祝福とのろいを、あなたの前に置く。あなたはいのちを選びなさい。(申命記 30・19)

その男性と別れる決心をした私は、「結婚」を主の御手にゆだね、結婚を忘れることにしました。

しかし主よ。この私は、あなたに祈ります。神よ。みこころの時に。あなたの豊かな恵みにより、御救いのまことをもつて、私に答えてください。(詩篇 69・13)

そんなある日、勤務する学校で、英語検定試験のために日曜出勤をしなければならぬ時がありました。その少し前の四月には新人の男の先生が常勤講師として加わり、こんな挨拶をされました。「私はイエス様

6人の証し

Unser Herr lebt

のお導きで、ここに参りました」と。私はこれを聞いて、親近感よりむしろ警戒感を募らせました。異端と言われる宗教団体が、よく家を訪ねて回っていたからです。英検の日が近づいたある時、その先生が日曜日に出勤できるかどうか気になり、「あの、先生はクリスチャンでいらつしやいますね。どこの教会に行つてらつしやるんですか」と尋ねると、「いやあ、僕は、教会ではなく集会で」と、「集会」という言葉を耳にしたとたん、「ベックさんですか」との問いが私の口から反射的に出ていました。その先生は「どうしてベックさんを知っているの!」と職員室の椅子から転げ落ちそうな勢いで驚き、鹿嶋に來たいきさつを話してくれました。その先生とは、ベックさんの勧めで鹿嶋に集会を開いた山口一郎兄弟でした。まさか、吉祥寺キリスト集会とは縁もゆかりもない南茨城の田舎で、「ベックさん」という名前を聞くと、山口兄弟にとっては晴天の霹靂であったようです。その頃、兄弟は、奥様の寿子姉妹

と、同居されることになった実のお父様、そして、寿子姉妹の妹さんの大根田恭子姉妹の四人で、ご自宅で礼拝を始めたばかりでした。私は、この主イエス様の人知をはるかに超えたお導きに畏れ驚きました。そして、その鹿嶋集会で、およそ十五年ぶりにベックさんと再会しました。もう天国でしかお会いできないだろうと、集会から離れて彷徨っていた私に、ベックさんは「やあ、恵子ちゃん、どこに行っていたの」といなくなった子羊が見つかったと、あの大きく温かい手で握手し喜んでくださいました。

わたしは失われたものを捜し、迷い出たものを連れ戻し、傷ついたものを包み、病氣のものを力づける。

(エゼキエル 34・16)

ベックさんとの再会の喜びの中で、私は通っていた教会で出会った鎌田みつ子さんという姉妹の話をベッ

クさんにしました。彼女は幼い四人の子をもつ母親でしたが、肺がんを病み、絶望の中にありました。ベックさんは時を置かずにもつ子さんのお宅を訪ねてください、ご主人にはイエス様の救いを、そして、みつ子さんには、「死は終わりではない。イエス様を信じる者は死んでも生きる」と天国への希望を伝えてくださいました。また、残して逝く子供たちのことも、「全て主にお任せしていい」と、主に信頼するよう話されました。間もなく、みつさんは天に召されましたが、そのお顔は安らかで笑みを浮かべていました。

わたしは世の光です。わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです。

(ヨハネ 8:12)

鹿嶋集會に集うよう導いてくださった主イエス様は、兄弟姉妹との温かく深いお交わりを通して、主

の御臨在とご愛を示してくださいました。そして、私は居心地の良い場所を得た喜びにひたりながらも、相変わらず教師の仕事に打ち込んでいました。ところが、その学校が、経営者が替わったと同時に経営難になり、ついに、退職を勧告されてしまいました。

私は、遂方に暮れ、これから先、仕事を失くしてどう生きていくべきかをイエス様に祈り始めました。そうする中で、これまで心の隅にずっといだいていた願望を、主に正直に告白しました。それは、外国の大学院で「応用言語学」を勉強したい、という願望でした。独身で実家通いだったこともあり、貯金もそれなりに貯まっていました。退職し、祈りつつ勉強を始めた翌年の二〇〇〇年に、主は結婚や再就職でもなく、イギリスの大学に導いてくださいました。そこは、ロンドンから電車で東に二時間ほどのエセックス州コルチエスターというイギリスで一番古い町にある大学でした。

あなたが右に行くにも左に行くにも、あなたの耳はうしろから、「これが道だ。これに歩め。」と言うことを聞く。

(イザヤ 30:21)

私は大学院の授業についていくのに必死で、睡眠時間は五時間あればいい方でした。私はそこで、日本の徳島県で二十年間も宣教師として働いたという一人の老婦人に会いました。アイリーンさんというその女性は、ご自身が通うバプテスト教会に私を連れて行ってくださいたり、またご自宅に招いてお茶をご馳走してくださいたりして、主にある母のように信仰的にも精神的にも私を支えてくださいました。そして、彼女の教会で証しすることになり、私は、ただ過去を振り返り、結婚しようとしたができず、職も失ったことなど、イギリスに來たいきさつを話しました。その時引用した聖書のみ言葉は、次のものです。

それから(イエスは)弟子たちに言われた。「わたしがあなたがたを、財布も旅行袋もくつも持たせずに旅に出したとき、何か足りない物はありましたか。」彼らは言った。「いいえ。何もありませんでした。」

(ルカ 22:35)

このみことばの通りに、右も左もわからないイギリスで、アイリーンさんという方との出会いをはじめ、生活上や学問上の、自分の能力では解決できない問題に主は手を差し伸べて、私の必要のすべてを満たしてくださいました。

そして二年後、大学院を修了し日本に帰る間際に、アイリーンさんを通じて主はこう語ってくださいました。「神様はいつも私たちが欲しいものを与えてくださるとは限りません。しかし、私たちに必要なものは、必ず与えてくださいます」。

イギリスから戻り、幼児から一般の人までを対象にした「英語教室」を茨城の自宅で開くことにしました。四十歳を過ぎていましたので、どこの学校も正教員として雇ってくれるところがなかったのです。しかし、大学院で学んだ知識を生かしながら、小さな教室運営は楽しく、鹿嶋集会にも再び喜んで通うことができました。

鹿嶋集会を通じて頂いた恵みは、九州の福岡に住む独り身の叔父にまで及びました。叔父は放蕩をした挙句、酒に酔って四階のアパートのベランダから落ちて首から下が不随になつていたのです。それを知った福岡集会の兄弟姉妹は、大変に心を痛めてくださり献身的に叔父の元に通ってくださいました。そうした兄弟姉妹を通じて、主はその叔父をも憐れんでくださり、救ってくださいました。主は最も主のご愛が必要な人に、絶妙のタイミングで人を用いて、ご自身のご愛を示してくださいることを再認識しました。

私は生来、「自分が何かをしなくては」、「自分が自分が」という私の強い性分です。しかし、鎌田みつ子さんとの出会いやイギリスでの体験、またこうした叔父の姿を見て「ああ、ただ主を信じて生きていさえすればいい。どこに運ぶか、どこに置くかは主がお決めになる」と思うようになりました。

自宅の英語教室は、二年が経過し、通ってくださいる生徒さんも増え始めた頃でした。私は、心の中で、とうに忘れたはずの、いや、忘れようとしていた「結婚」にまたもや苦しむようになりました。

その頃、ベックさんがメッセージで引用された、「あなたの口を大きくあけよ。わたしが、それを満たそう。」（詩篇81・10）のみことが心に残りました。またベックさんはその中で「主に期待しない者には、恵みは与えられない」とおっしゃいました。この言葉で、私は次の聖句を思い出しました。「しかし、女は言った。『主よ。

そのとおりです。ただ、子犬でも主人の食卓から落ちるパンくずはいただきます。』そのとき、イエスは彼女に答えて言われた。『ああ、あなたの信仰はりっぱです。その願いどおりになるように。』すると、彼女の娘は、その時から直った。』（マタイ15・27、28）主は、異邦人の女にあげるパン（恵み）はないと冷たく突き放します。それでもその女は、イエス様なら必ず恵んでくださるはず、と心から信じて訴え続けるのです。ついにイエス様は、その女の信仰を見て女の願いに応えられました。こうした主に期待して「主に信頼し尽くす」という信仰はやはり私にはない、と改めて悟りました。この世の基準で自分の年齢や環境を卑下し、人の目で自分を見て、主の目線から自分を見ることはしていません。また、ベックさんは、「主は必ず恵んでくださる、と信じているなら、まだ与えられていない恵みを期待し、頂く前に『ありがとうございます』と先にイエス様にお礼をいいなさい。イエ

ス様は、繰り返し『あなたの信仰の通りになりますように』と言われています。口を大きく開けて待っているのです」というようなことを話してくださいました。

私はそれから、「主よ、私に必要な主は必ず与えてくださいますから感謝します。でも、独りで生きていくことが主の御心でしたら、喜んで独りで生きていくことができるようにもしてくださいますから、感謝します。」と祈るようになりました。集会の兄弟姉妹も共に祈ってくださいました。

イエスは彼女に言われた。「もしあなたが信じるなら、あなたは神の栄光を見る、とわたしは言ったではありませんか。」（ヨハネ 11・40）

祈りつつ、大事なものは私の結婚ではなく、主の御栄光が現れることなのではないか、などと思うように

なっていた二〇〇三年の七月に、一通の奇妙なメールが入りました。

「やあ、初めまして、恵子さん。僕はDavid（デイヴィッド）です。君の教え子という女性から紹介されて、メールしました。」

「は？ 教え子？」

突然のメールに面くらいました。私には、アメリカに住む教え子が確かにいました。最初に勤務した高校で教えたその子は、アメリカ人男性と結婚して、シアトル近郊に住んでいたのです。そして、もう一つ驚いたのは、メールの送信者である彼の名前でした。口を大きく開けるのなら大きくと、不遜ながら「イエス様、もし、結婚があなた様の御心でしたなら、できれば、ダビデ（英語名でDavid）のように主の前に正直な男性をお与えください。正直で信頼できる方をお与えください」と祈っていたからです。ですから、そのメールの名前を見たたん、これは、本当だろうか、と心臓が止ま

るくらい驚きました。

彼を紹介してくれた教え子は、たまたま夫婦で出かけたあるお宅の夕食会で、デイヴィッドと会ったそうです。カリフォルニアの大学を卒業後、広島で英語の先生を数年していた彼は、日本人や日本文化に興味があることを私の教え子にその夕食会で話したそうです。「年齢もそう違わないし、その話しぶりや雰囲気は恵子先生に合うかもしれない」と教え子はその時、直感で思ったそうで、咄嗟に私とのメール交換を提案してくれた、というのが彼の最初のメールに至った経緯でした。

その最初のメールから、一度も会ったことのないデイヴィッドと頻繁にメールで話すようになりました。仕事は、米国ワシントン州の経済部門の公務員であること、そして、彼の父親が、アメリカのバプテスト教会で牧師をしていること、小学生の時にイエス様を受け入れたこと、姉二人、弟一人の四人兄弟であること、母

親が病気で彼が十歳の時に盲目になってしまったこと、などを話してくれました。そして、幼い時に、イギリスのエセックス州に父の牧師の仕事で住んだことがあることも話してくれました。またその後の結婚式で顔を合わせたアイリーンさんと義父には、共通の知人がいることもわかりました。主は、遠く離れた一見何の関わりもない点と点を、このように結び合わされるのかと、これも畏れ驚いたことでした。

「教え子の計らいで、二〇〇三年の十一月に私は渡米して彼と会うことができ、彼もまた二〇〇四年の二月に茨城の私の家を訪ねてくれました。はるばるアメリカからやってきた男性に、両親はもとより、妹夫婦や親戚までもが集まる大歓迎ぶり、日頃めったに口を利かない無口な義弟が、「恵子ちゃん、あの人はいい人だと思う」とポツリと私に言った言葉がとても心に響きました。」

実は、デイヴィッドに初めて会ったときに目にし

たのは、彼の澄んだ瞳と彼の持つ「障害」でした。彼は、生まれつき、両手に障害を持ち、両手ともひどく変形して真つすぐに伸びないので、彼は生まれて一度も手を真つすぐに下したことがありません。また手のひらも大きく開くことができません。その「障害」を目にした時に、私は正直、その外見を受け入れられるだろうか、それで彼を嫌いになってしまわないだろうか、自分で自分が心配になってしまいました。でも、その時思い浮かんだのは、このみことばでした。

「人はうわべを見るが、主は心を見る。」（1サムエル 16:7）

「この障害は、彼のせいではない。理由はわからないけれども、イエス様が彼にお与えになったものなのだ」。不思議とこのような思いになり、彼の「障害」さえも、なんだか愛おしいような気がしてきました。私は、

かつては、人の内面よりも容姿に優れた人に心を奪われるような者でした。もし、もつと自分が若いころにデイヴィッドに会っていたならば、私は彼の外見だけを見るような浅はかな者であつたでしょう。三十半ばの痛い経験は、私の愚かさや傲慢さを砕くには必要であつたのだと思えます。

後で、彼の父親から、幼い時から彼には「お前は特別に神様に愛されている子だ。だから、お前にダビデ(David)という名前を付けたんだよ」と言つて育ててきたという話を聞き、胸が詰まりました。「手が人と違っていることで、思春期の頃は悲しい思いもしたけれど、この父の言葉があつたから、めげないで生きてこられた」とデイヴィッドも話してくれました。また、彼の弟は、兄について触れた時「自分が生きてきた中で、自分の兄ほど、正直な男を自分は知らない」と話すのを聞いて、私は、デイヴィッドは私の祈りに、主が応えてくださった人なのだ、と思いました。そして、三度

目にシアトルで会ったとき、彼の結婚の申し出を受け入れました。全く、恐れも不安もありませんでした。主がすべてのお膳立てをしてくださったことが分かったからです。

あなたは、わたしが主であることを知る。わたしを待ち望む者は恥を見ることがない。(イザヤ 49:23)

ベックさんから言われた「金」を頂くのに、二十五年の月日が必要でしたが、それは、自分がデイヴィッドにふさわしくあるよう作られる日々であつたと同時に、多くの方々の論しや祈りに支えられた日々でもありました。

ベックさんとアメリカから来たデイヴィッドの父親の二人による司式で、私たちは、御代田国際福音センターで結婚式を挙げることができました。出会つて四度目のことです。主を救い主としてまだ知らない私の

両親でさえも「これは神様がなさったこと」と言つたほどの喜びようでした。

次のみことばが、私たちの結婚指輪に刻まれました。

あなたの行かれる所へ私も行き、あなたの住まれるところに私も住みます。あなたの民は私の民、あなたの神は私の神です。(ルツ 1:16)

デイヴィッドが選んだみことばには、遠く離れた国に住み、人種も国籍も違う者同士が主によつて出会わせていただいた感謝が込められています。何もかも違う中で、同じ主イエス様を家の頭として二人で生きることの幸いを感謝しつつ歩いてきましたが、振り返ればもう十五年の歳月が流れています。この間に、九州の叔父が福岡集会の兄弟姉妹に最期までお世話頂きながら召され、無口な義弟(二番目の妹の夫)も五十歳の若さで癌で召されました。召される前に、見舞つてく

ださったベック兄妹を通して、主を受け入れ、死の恐怖から天国への希望をもつことができました。そして、勝手ながらも私の信仰の父と仰いでいたベックさんも召され、さらにデイヴィッドの最愛の母親も召されました。

こうした、さまざまな出来事がある度に「あなたはわたしを愛しますか」(ヨハネ 21:16)と主イエス様に問われている気がします。この問いの重みは、十九歳で主を救い主として受け入れた日から、年々重さを増しているような気がします。両親の救い、親戚や友人、知人の救い等など、まだまだ主の御栄光を拝することが出来る幸いを心から感謝し、「主よ、あなたはいつさいのことをご存じです。あなたは、私があなたを愛することを知つておいでになります」(ヨハネ 21:17)とペテロのように答える者でありたいと、日々祈らざるを得ません。主は、本当に生きておられますから。

佐山 恵子 Wallace (さやまけいこウォラス)
 一九六〇年 茨城県銚田市(旧・鹿島郡旭村)に三人
 姉妹の長女として生まれる。茨城県立銚田第一高等学
 校、早稲田大学第二文学部英文学科、英国立エセック
 ス大学院応用言語学科修士課程、現在シアトル日本語
 補習学校中学部教員として勤務

夫 David Wallace 米国ワシントン州公務員

現住所 米国ワシントン州タコマ市



キリスト集会へのご案内

吉祥寺キリスト集会

【電話】0422-21-8450 (集会所)

東京都武蔵野市吉祥寺本町4-9-11
〒180-0004

日曜礼拝・福音集会 10:30 / 18:30

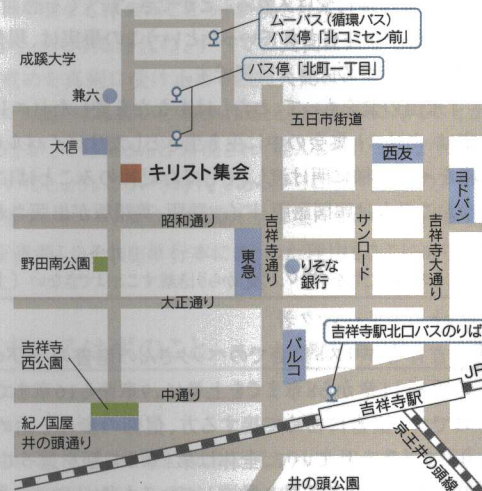
火曜学び会 11:00

木曜祈り会 19:00

子供日曜学校 9:30

中高生日曜クラス 9:30

【バス】ご利用の方は、吉祥寺駅北口バスのりば
「1番のりば」「2番のりば」より乗車して
「北町一丁目」で下車してください。



牧師制度がありません

キリスト集会には牧師制度はありません。

いろいろな職業のかたが自発的に責任を分かちあい、いっさいの強制はなく、
純粋に聖書のみことばのみに立ち、主だけを中心とする交わりを大切にするひとびとの集いです。

組織も、会則もありません

キリスト集会には役員会も、総会も、定例会議も、会則もありません。

みなが助けあって重荷を分かちあい、すべてが自発的によるこびをもってなされます。

会員制度がありません

会員として登録されるような、いわゆる会員名簿にあたるものはありません。

出入りは自由であり、宗教団体的な制度はいっさい排除して、
主ご自身のみを頭とし、主ご自身のみが満ち満ちておられることを祈り求めている集会です。

献金制度がありません

月定献金、年定献金などの献金制度はなく、すべての献金は自発的に行われ、
無記名ですからだれがいくらさげたかは主のみがごぞんじです。

日曜礼拝

祈りと賛美がつぎつぎにささげられ、主の十字架のあがないの血潮を覚え、
パンとぶどう液にあずかります。
あらかじめ決められたプログラムはなく、主に示されるままに各人が祈り、賛美します。
礼拝の後は福音集会で、兄弟によって主のみことばがとりつがれます。

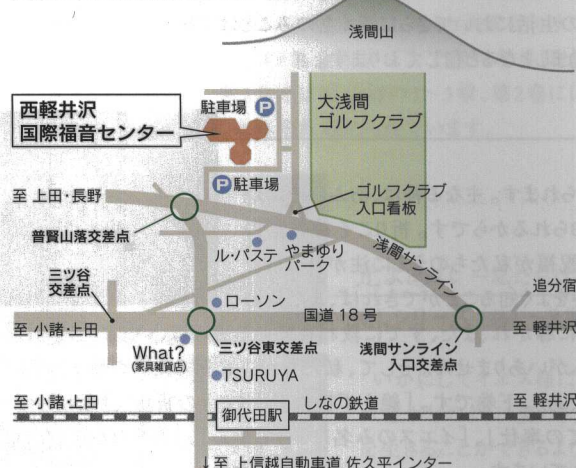
家庭集会

家庭で開かれる集会で、兄弟によるメッセージ、兄弟姉妹による証しがあり、
福音の喜びをつたえる集いです。世界で百カ所以上あり、多くのところで日曜礼拝が行われます。

よろこびの集い

西軽井沢国際福音センターはじめ世界各地で開かれ、全国の人々が集まる大きな集会です。
快適で経済的な宿泊施設を利用し、ほとんど毎週どこかで開かれます。

西軽井沢国際福音センター



西軽井沢国際福音センター

【電話】0267-32-6400

長野県北佐久郡御代田町塩野450-15 〒389-0201

西軽井沢国際福音センター・ゲストハウス

【電話】0267-32-6444

長野県北佐久郡御代田町塩野450-33 〒389-0201

アクセス

【鉄道】

しなの鉄道で御代田駅下車。
タクシーで約5分(1000円程度)
徒歩約45分=3Km

御代田駅へは東京駅より
北陸新幹線にて軽井沢駅下車、
しなの鉄道に乗り換えて三つ目
御代田駅で下車。

【車】

上信越自動車道
佐久平インター下車約20分(約7km)

■周辺の道路に車を駐車させることは
禁止されていますので、厳重に
お守りください。

モーセの十戒 神の聖なる戒め

ゴットホルド・ベック著

モーセの十戒は約三千五百年前、主がモーセを通してイスラエルの民に告げられた「十の戒め」です。そこには「聖なる神のみこころ」が現されています。ですから、当時のイスラエル人だけでなく、あらゆる時代の、すべての人間に対する訓戒と言うことができます。そして、この戒めを真剣に受け止めるとき、人間は自分の罪深さを思い知らされ、罪の問題の解決を願ってイエス様による救いに導かれる、という恵みに与ることができます。ところが、この大切な「聖なる戒め」が、今はほとんど無視され、軽んじられています。それは近年の社会秩序の乱れとも無縁ではないでしょう。こういう時代であるからこそ、「十戒のメッセージ」に心の目を向ける必要がある、と思います。キリスト集会の雑誌「主は生きておられる」が創刊号から12回にわたって「モーセの十戒」を連載し、それを単行本にまとめた理由もここにあります。



すぐに起こるはずのこと—ヨハネの黙示録 (第1～4巻)

ゴットホルド・ベック著

ヨハネの黙示録は、初代教会で何よりも大切にされました。しかし、黙示録の内容と文章は、現代の私たちには難解なところがあり、誤読も多く、霊的に正しく読み解くことは困難になっています。しかし、この黙示録の中にこそ、末の世にある私たちにとって、何よりも必要なことが示されているのです。私たちはこの黙示録に、もっと注意を向け、深く深く読みこむべきではないでしょうか。この本は、吉祥寺キリスト集会の学び会で、約1年半ほどの間に行われたベックさんのメッセージをまとめたもので、第1巻には黙示録の1～3章、第2巻には4～7章、第3巻には8～15章、第4巻には16～終章までが、それぞれ収められています。



光よあれ —私たちは主のもの

証しシリーズ (第1～9集)

いかにしてイエス様に出会い、救われたか、またそれによって、人生がどのように変わり、重荷から解放され、よろこびと平安の日々を生きることができるようになったかを、多くの方々が証しされています。第1集から第9集まであり、実に596人の方々がそれぞれの人生と主にあるよろこびを感動的に語っておられます。



実を結ぶ命 がんのうち勝ったドイツ少女リンデ

ゴットホルド・ベック編著

二十歳そこそこのドイツ少女リンデが、がんであることを知りながら、自分の死をかくも冷静に受け入れることができ、すべてを感謝し、自分の思いは少しも求めずに、喜びつつ召されていったというこの事実は、現代の奇蹟であり、神の存在を証しする一つの大きな証拠です。

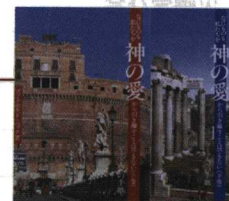
「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した」(エレミヤ31・3)リンデの、主に従い通す態度は、キリスト集会の中に生き生きとしたリバイバルの波を起こし、多くの人々が自分の支配権をイエス様に明け渡し、そしてただ神のみことばにのみ拠り頼む者へと変えられています。なおこの本は韓国語版、ドイツ語版、英語版が出版されました。



なにもも私たちが神の愛から引き離すことはできない (上・下巻)

ゴットホルド・ベック著

吉祥寺キリスト集会でのベックさんの聖書の学びのうち、「ローマ人への手紙」1章から8章までを上巻に、9章から16章までを下巻にまとめたものです。聖書に初めて接する方、信仰の歩みを始めた方のために分かりやすく書かれていて、全体は第1章から順を追って学ばれていますが、一つ一つのメッセージが深い霊的な内容を持ち独立しているため、どこから読み始めても、豊かな恵みが私たちの心に注がれます。私たちが神様のみことばに目覚め、救われるためには、たった一つの聖句でも十分でした。しかし、さらに成長していくためには、多くのみことばが、聖書全体が必要です。この本は、聖書を「研究」するためではなく、日々の生活においてさらに深く主のみことばを味わいたいと願っておられる方々のために、すばらしい励ましとなると信じております。



絶えず祈れ (上・下巻)

ゴットホルド・ベック著

主は私たちが祈ることを望んでおられます。主なる神は、あふれるばかりの祝福を、私たちに注ごうとしておられるからです。祈りこそ神の富のための鍵なのです。そして信仰は、祝福が私たちのうえに注がれる扉を開けるのです。祈りの本当の大切さをよく知ることができれば、まだ救われていない方々はイエス様のみもとに導かれ、また、すでに救われている方々は、いまよりもさらに何倍もイエス様に祈るようになるにちがいありません。そして、私たちが主に祈るための励ましとなるのが、この「絶えず祈れ」の上巻であり、下巻です。「絶えず祈れ」、「まことの祈り」、「祈りへのまねき」、「真剣な祈り」、「祭司としての奉仕」、「イエスのみ名によって祈る」、「祈りのかぎりない可能性」などのメッセージが収められています。



■ キリスト集会の本、雑誌などの注文はハガキで下記迄。電話での注文は、お控えください。

注文先 〒180-0004 東京都武蔵野市吉祥寺本町 4-9-11 吉祥寺キリスト集会

集会の出版物

主は生きておられる
Unser HERR lebt

Unser
HERR
lebt
主は生きておられる

主は生きておられる 第51号
定価100円（税込み）2019年7月20日発行

編集スタッフ 岩本秀造 黒澤錬二 鈴木力
芳我幸雄 福留伸子 牧野正士
印刷・制作 ニューライフ・ミニストリーズ 新生宣教団
題字デザイン 飯守恪太郎
発行所 キリスト集会
サイトマップ(キリスト集会のご案内) <http://christ-shukai.net/>

今回も多くの方々から写真の提供や資料作成など、
ご協力をいただきましたこと厚く御礼申し上げます。
勝手ながら、お名前は省かせて頂きます。
ご協力ありがとうございました。

【訂正のお詫び】

前月号(50号)P29～P47にて、
「ベック兄記念会」を「ベック兄記念喜びの集い」と、
お詫びして訂正させていただきます。